

## 「木場角乗保存会」活動による木場川並技能の伝承と実践

川 藤 健 司 殿

深川木場内で丸太の樹種の仕分け、格付け、検量、運搬、陳列、保管に当たる職業は「川並（かわなみ）」と呼ばれ、原木の水上輸送を主とする筏師とは明確に区別されていた。300年余の昔、自然発生した川並衆の仕事の余技が、現在受け継がれている伝統芸能「木場の角乗（かくのり）」、「木場の木遣（きやり）」である。角乗は材木をいかに乗りこなし操れるかを競い合っていた技を、木遣は材木を操るときに互いの息を合わせるためにうたわれた労働歌を源としている。

川藤健司氏は、時代の変遷とともに木場川並衆の聖域ともいえる原木目利き技能の発露の場が縮小していく中で、元川並であり角乗の第一人者として、「木場角乗保存会」とともに40有余年にわたり伝統技能の伝承、実践活動を継続的に行ってきた。そして、江戸から昭和にわたる建築文化を支えた薫り高い川並の伝統の技を、民俗芸能として今に受け継ぎ、都民の文化にまで高めるとともに定着させ、未来に伝えるに至っている。

保存活動の歴史は、川並の存在基盤が脆弱化する中で、1952年9月に角乗技術の保存と育成を目的とした「東京木場角乗保存会」の設立に始まる。そして同年11月に「都技芸（郷土芸能）木場の角乗」として東京都無形民俗文化財に指定され、その活動の大きな拠り所を得た。地道で着実な保存活動により、1993年からは「ふるさと東京まつり」の一環としての「角乗大会」を、2000年からは江東区民俗芸能大会（東京都教育委員会主催）において江東区民祭り協賛事業として一般公開されるようになった。また、これらの継続的な文化活動は木場の伝統的な風物詩として多くのマスメディアに取り上げられ、角乗に対する高い関心と併せて、深川木場における江戸文化の継承として喝采をあびるに至っている。現在、「木場角乗保存会」会員は25名であり、木場4団体（東京木材問屋協同組合、東京原木協同組合、東京木場製材協同組合、東京銘木協同組合）の支援、東京都、江東区の後援により、地域文化の発信と保全に継続的に尽力している。

同氏は、木場を舞台に活躍した川並を父に持ち、1943年に生まれた。1952年の第1回「木場の角乗」が深川の黒船端側の大横川で公開された。このとき、「東京木場角乗保存会」による演技が行われ、9歳にして2つの演目（「かわせみ」「戻り籠」）に子役で出演し、ここから、「木場の角乗」との関わりが生まれた。1963年から本格的に父について家業の川並の仕事を手伝うようになり、自らの角乗技術を磨く傍ら、指導者としても活躍するようになった。そして、1983年の演技からの引退を機に、第3代目会長の小安四郎氏（地域文化功労者として文部大臣表彰〔1983年〕）らとともに本格的な後進の指導育成、材木関係や外部支援者との関係強化に努め、文化としての「木場の角乗」を伝えていく環境づくりを整えた。1996年には、前会長の小安氏の後を継ぎ、「木場角乗保存会」の4代目会長になった。会長に就いてからも、保存会を中心とした継承者の育成に努めるとともに、「ふるさと東京まつり」や「江東区民祭り」の場を活用したより高いレベルの基盤づくりに邁進している。今後も、継承者を育てながら、木場に生まれた角乗文化を守ってい

きたいと強く願っている。

このように、「木場角乗保存会」会長である同氏の「木場川並技能」の伝承と実践、都民文化にまで高めた功績は、まさしく日本建築学会文化賞にふさわしいものと確信する。

よって、ここに日本建築学会文化賞を贈るものである。